

反障害通信

22. 12. 18

126号

何故、「廣松ノート」を取ろう、書こうとしているのか？

すでに、読書メモの中で、「廣松ノート」というシリーズを始めていて、「廣松ノート(1)」として『唯物史観の原像』をとりあげています。その冒頭でこの文のテーマ「何故、「廣松ノート」書こうとしているのか？」を書き置くことでしたが、いろんところで、そのことは書いてきているので重複するとパスしていました。しかし、断片的に書いていたことだったり、そもそもわたしの断片的に書いていた文にさえ当たっていないひともいることも考え、やはり一度まとめてみます。

わたしの廣松理論との出会い

わたしが「廣松渉」という名を最初に知ったのは、新左翼運動に大きな影響を与えている思想家の二人の中のひとりとしてでした。もうひとり、吉本隆明さんです。吉本さんの方はいろいろ参加していた学習会でとりあげられていて少しは読んでいたのですが、後には、わたしの反差別論からすると、とても共鳴できなくなっていました。廣松さんは、実際に二度の講演会でであってました。といっても、一度は主催者側で雑務に当たっていて、ちらっと姿を垣間見た程度で、もう一度は労働組合の方の講演会でした。ですが、その時は、知識欲をくすぐられただけで、わたしの理論的な指向性と交差はしていませんでした。廣松さんの本もまだ一冊も読んでないままでした。

廣松さんの本との出会いは、大学時代の友人と久しぶりに再開して、学習会をしようかという話になり、それで本を彼に選んでもらったら、関心がエコロジーにあって、雑誌に連載していた「生態史観と唯物史観」を指定し、そのコピーをもらい、お互いが交互にレジメを出していくという方法で学習会を始めましたが、わたしが一回レジメ出してから相手のレジメ待ちの間に「生態史観と唯物史観」を読み切り、『唯物史観の原像』を読み、『資本論』を読み始めました。結局相手からレジメは出ず、学習会は終わりましたが、それからマルクス／エンゲルスの読み落としていた本の学習と廣松学習が始まりました。

差異があるから差別があるという論理への批判のための廣松物象化論＝廣松差異論

当時わたしは、継続的総括作業の中身として反差別論をやっていて、差異があるから差別があるという論理の批判のために、差異論のとらえ返しをしていました。そういう中で、廣松物象化論に飛びついたので。廣松物象化論はもともとマルクスの『資本論』の物象化論から来ていて、マルクスの物象化論の「社会的関係を自然的関係と取り違える」ということを更に、異化というところから認識論的に深化展開した内容で、それは廣松差異論ということで、言語論と交差し廣松共同主観性論ともリンクしていきます。

そこで、この廣松物象化論から反差別論を展開していけると廣松さんの本を読み込んでいくこととなります。

誤解のないように書いておきますが、廣松さんにも反差別というテーマがないことはな

かったのですが、とりたててテーマとして取り上げていませんでした（註1）。

身体的差異と非身体的差異というアポリアからの脱出——関係論的なとらえ返し

さて、わたしは反差別論を「差異があるから差別がある」という論理への批判から試みようとしていましたが、最初に身体的差異と非身体的差異と分類することによって、アポリア（論難）に陥ってしまいました。そこからの脱出は、身体論の「身体とは関係性の分節である」という論攷とそのようなことを含んだ廣松身体論や廣松差異論、廣松物象化論の実体主義批判の中での、「関係の第一次性論」でした。

廣松物象化論の反差別論への援用

さて、わたしが本を出したときに、恐らく誰を読者の対象として本を出そうとするのかの自問がありました。本のタイトルからして、障害の医学モデルから「社会モデル」的なことへの転換として、パラダイム転換的な内容を孕んでいるとしていました（註2）。そもそも、先に障害関係の出版社にいろいろあたったのですが断られ、廣松さんが関係した出版社ならばと（註3）「情況出版」に話を持ちこみました。それでプレゼンのために書いた文（註1）で、それは廣松シェーレの人たちとの対話という内容を持っていたのです。投稿文のタイトルは、編集者の提起で変えましたが、もともとは「廣松渉物象化論の反障害論への援用-『反障害原論』の隠されたサブタイトル」というタイトルでした。

本を出版して、一番の批判は先に書いた、誰を対処に本を書いたのかという批判だと思っていました。ですが、理論展開をすること自体が、そもそも知の抑圧として批判がおきにくることでした。ですが、「理論なき運動は無」（註4）という提言があるように、理論なしに運動は進みえません。問題はユニバーサルな形で、展開していくことです。ほんとは、先に平易な文を書いて、後から理論的深化を図ることだったのですが、理論的展開として現実にそのようには進みえません。後で、二つの文、「障害ってなーに？ 障害ということ根源的にとらえなおす」<http://www.taica.info/wdl.pdf>「ソフトクリームのようなウンコの話 —母の介護の記録と反省から介助労苦論批判のために—」[sofutunnko2.pdf](http://www.taica.info/sofutunnko2.pdf) ([taica.info](http://www.taica.info))を出すに至っています。これは本に比べて平易というだけで、実際に読みやすいものにはなっていません。まだ課題を果たせないままです。しかも「ソフトクリームのようなウンコの話」の方は反省記で、それも深化をなしえぬままです。これはわたし自身が死を間近にして被介助者になったときに実践的に深化させることとしている未未完の文書にすぎません。

廣松パラダイム転換論は革命論である

実は、もう一つの課題があります。それは、わたしはいろんな被差別の問題を抱えさせられる中で、その問題を差別というところから読み解いていきました。その中で、わたしが抱える障害問題を始めとするさまざまな問題、その解決のためには、差別の問題の土台としてある、労働力の価値を巡る差別、そのことは、この社会の、すなわち資本主義社会の労働力の価値という物象化にとらわれている社会で、そしてこの資本主義社会における差別ということがこの労働力の価値ということに収束することをとらえ返していきました。そのことから障害問題の解決のためには、あらゆる差別の問題の解決のためには、資本主義社会の止揚なしにはなしえないということに至りつくのです。障害差別の根幹には、資本主義社会の根本原理、「能力は個人がもっているものだ」という能力の各私性という物象

化の問題があると押さえられるのです（註5）。そのことは認識論的には、意識の各私性ということをも物象化として押さえしていく必要に迫られます（註6）。

さて、廣松さんが後に書いた廣松理論の入門書を、「闘争宣言」と解説したひとがいたのですが、廣松さんの「物的世界観から事的世界観へ」というパラダイム転換論はまさに革命ということなのです。

こう断言しつつ、大急ぎで理書きを書き加えねばなりません。このままでは、意識を変えれば、理論を習得すれば革命が起きるといような、宗派的なイデオロギー主義に陥ります。そこには、なぜマルクスが唯物史観を突き出したのかというとらえ返しが欠落しているのです。

もうひとつ、補足しなければならない問題があります。それは「差別の問題は、内部対立を生み出す、差別を言挙げしていくことは疲弊をもたらす」といような話が左翼サイドから出て来ます。わたしはこのことを原則主義と現実主義の弁証法（註7）としてとらえていこうと思っています。反差別の問題は原則主義の根幹にあると押さええています。わたしはむしろ左翼は、現実主義の中で原則主義をないがしろにする中で、左翼の解体が、社会変革運動の解体がすすんだのではないかと考えている次第です。

このような思いを持ちながら、廣松ノートを取り、書いていきたいと考えています。

（註）

1 これに関しては、わたしが本を出した後、『情況』への投稿、「廣松渉物象化論の反障害論-『反障害原論』の隠されたサブタイトル」[hiromatubusho.pdf \(taica.info\)](http://hiromatubusho.pdf(taica.info))を参照ください。

2 わたしはすでに関係モデル的な突き出しをしていましたので、「社会モデル」という過渡的なことを突き出したことが妥当だったかの検証が必要になります。本のタイトルからして検証の対象になっています。

3 廣松さんが第一次『情況』の編集者古賀暹さんに自分の金を渡して、これで『情況』を再刊して欲しいと提起した、という逸話があります。

4 全共闘運動の中で突き出されたスローガンに「実践なき理論は死、理論なき実践は無」といことがあります。

5 スターリンの「能力の違いがあるので、賃金が違うのは当たり前だ」といおおよそ共産主義の概念からすると真逆なとらえ方は、逆にスターリン・ロシアがいかに社会主義と無縁であったかを物語っています。

6 今回の読書メモの『世界の共同主観的存在構造』は、繰り返しこの「意識の各私性」といことを批判しています。

7 弁証法を法則の物象化的にとらえることがあります。「発達保障論の弁証法」がその端的な例ですが、そうではなくて対話としての弁証法という廣松さんの押さえる「弁証法」です。もっとも、「弁証法」と言っておしまい、といようなことでなく、そこから中身の展開が必要になることは言うまでもありません。この「原則主義と現実主義の弁証法」の他、「反暴力主義と非暴力主義の弁証法」などをわたしは押さええています。まだ試論にすぎません。

（み）

（「反差別原論」への断章）（55）としても）

読書メモ

今回は「廣松ノート」の(2)で、『世界の共同主観的存在構造』を取り上げます。

実は、一読して再読しながらメモ作成に入っているのですが、つくづくわたしが「廣松ノート」を書くなどということは大風呂敷の類いのことだと痛感しています。

廣松理論は、すべての学の基礎としての哲学での幅広い学習の上に博学的な学が形成されています。わたしは哲学さえきちんと押さえられていず、各論的な学もかじっているだけにすぎません。

しかし、反差別というところからの廣松理論のとらえ返しというオリジナリティがあり、そこから切りこんでいるひとと出会えていません。切り抜きメモが多くなりますが、少しでも廣松理論の紹介と対話がなしえればとの試みです。

たわしの読書メモ・・ブログ 607 「廣松ノート (2)」

・廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房 1972 (1)

「廣松ノート」二冊目です。

すでに何度も書いていたことなのですが、廣松ノートをなぜ書こうとしているのかということ、はじめてわたしの文を読むひとのためにも、改めて「廣松ノート (1)」に書いておくことだったので、書き落としていました。それを今回、この読書メモを掲載する号の巻頭言に書きました。参照ください。

さて、ここのところいつも読書メモは蓄えがあり、余裕をもって掲載していたのですが、個人的なことがあり、底をついています。で、それでも継続は力なり（実際は「力なし」を自認していますが）ということで、順不同で掲載します。実際の読書順の、序文、『著作集』解説というところからの読書メモをとりあげます。書き上げた時点で、編集し直そうと思っています。そういうところでの仮掲載で、しかも何回かに分けた読書メモになります。

最初に序文です。

序 文

廣松さんのこの著に対する自己評価は序文にあります。

「所収の各論稿は、著者なりの問題意識と基本的意図を積極的に開陳したものであり、この意味では、拙い乍らも著者の“主要論文集”と呼ばれうるかもしれない。とはいえ、何分にもトルソーにとどまっている。……また、方法論的視座として利用する可能性ありとの廉で論点の具体化を慫慂された社会学、言語学、法（哲）学、経済学、精神病理学、数学基礎論、科学論などの幾人かの専門家諸氏の示教を無にせぬためにも、著者にとってそれは妄執ともいふべきものである——。倅い、忙中に閑を得て当の作業は一定の進捗をみているが、目下の状況では公刊までに猶暫くの年月を見込まざるをえず、他面ではこのトルソーは却って概観に便利であり、後日『存在と意味』を上梓した暁にも独立の存在意義を保持するものと思ふに到った。」i P・・・『著作集』の野家啓一さんの解説で、この著を入門書と書いていますが、「入門書」と言うにはあまりにも難しすぎます。廣松さん自身がこの著を前出した序文の中で「トルソー」と書いています。廣松さんの主著は『存在と意味』ですが、未完に終わっています。で、これを主著を出す前のとりあえずの「ト

ルソー」として出したようです。パラダイム転換を打ち出した次の廣松ノートでとりあげる『事的世界観の前哨』とこれはセットになっているようで、廣松著作のアウトラインを押さえるのに必須の著です。廣松さんには「廣松〇〇論」と言われることがいくつかあり、その観点からこの著をとりあげると廣松理論のアウトラインがほぼこの著の中に織り込まれています。後で、廣松〇〇論と称されるキーワード的なことをとりあげ、そこで廣松理論との対話を試みます。

まず目次を上げておきます。

目次

序 文

I

序 章 哲学の逼塞情況と認識論の課題

第一節 近代的世界観の破綻と「主観－客観」図式

第二節 既往の認識論の隘路と遺棄された案件

第三節 認識論の新生の当面する課題と視座

第一章 現象的世界の四肢的存在構造

第一節 現象的（フェノメノン）の対象的二要因

第二節 現象的（フェノメノン）の主體的二重性

第三節 現象的世界の四肢的構造聯関

第二章 言語的世界の事象的存在構造

第一節 情報的世界の四肢構造

第二節 言語的意味の存在性格

第三節 言語的交通の存在構造

第三章 歴史的世界の協働的存在構造

第一節 歴史的イメージの二肢性とその物象化

第二節 歴史的主体の二肢性とその物象化

第三節 歴史的世界の間主体性と四肢構造

II

一 共同主観性存在論的基礎

第一節 身体的自我と他在性の次元

第二節 役割的主体と対他性の次元

第三節 先験的主観と共存性の次元

二 判断の認識論的基礎構造

第一節 判断論の心理学的諸相

第二節 判断論の意味論的諸相

第三節 判断論の構造論的位相

三 デュルケーム倫理学説の批判的継承

索引

ここから本文に入りますが、冒頭で書いたように、読書順としてこの書が収められている『著作集』の当該部分の解説とこの『著作集1巻』の附録的についていた「月報」の読書メモから取りかかります。

『著作集第一巻』解説・解題&その他別編集版との対話]

『著作集』「解説」

この「解説」は野家啓一さん。廣松さんはいろんな学者と影響を与え合っていました。①廣松さんが、指導教官的に影響を与えたひと。②博学の廣松さんが、専門性をもったひとと対談し、互いに吸収し合うという構図、これは共著という形での著作を生み出しています。③もうすでに自分の総体的学を形成しているひととのシンクロナイズ的影響し合い、もしくは、もうひとつの哲学的体系から影響を受けて、一定廣松さんの影響だけでなく自らの哲学も持っているひと。

勿論、指導するとは指導されることという命題があるように必ずしも一方的関係ではなく、また三つに分けたとしても二つ的なことを合わせ持つひとでもありますし、そこからはみ出したひともあります。

野家啓一さんや今村仁司さんは③に当たります。野家さんは廣松さんの科学哲学の講座の前任者大森荘蔵さんの分析哲学系と廣松さんから影響を受けたひとです。わたしが野家さんで留目しているのは、廣松さんのパラダイム転換論とリンクする、クーンから読み解く書を書いている事です（註この読書メモは「たわしの読書メモ（15）／・野家啓一『クーン-パラダイム』（講談社）」（「反障害通信」18号所収）。

<http://www.taica.info/adsnews-18.pdf>

この解説は、野家さんの廣松渉論とでもいうべき貴重な論考になっています。

ここでは、野家さんの廣松解説の部分は、本文の中で指摘し、野家さんの独自のとらえかえしを切り抜きメモを残します。ただし、本文との重複を回避するために、野家さんが廣松さんの文を援用してコメントしている箇所は、参考にさせてもらい本文の読書メモ中に織り込みます。最初に目次を作って上げておきます。

- 一 はじめに
- 二 時代背景
- 三 同時代の評価
- 四 近代認識論の蹉跌
- 五 「共同主観性」の存立構造
- 六 「四肢的構造連関」と三項図式
- 七 言語論の射程

一 はじめに

「しかしデカルトの蟹みにならって廣松哲学全体を一本の木にたとえるならば、その根はマルクス主義哲学、幹は認識論および存在論、そしてこの幹から出る幾本かの葉ぶりの良

い枝が言語哲学、科学哲学、社会哲学、歴史哲学、などの各論当たるところ。その観点からすれば、本巻は廣松哲学の「幹」と、そこから出た一本の太い「枝」を觀望できる構成となっている。」525P・・・哲学的な体系的叙述を試みる者は、幹が認識論・存在論になっているのは当然で、むしろその中身が問題、廣松哲学の幹は、共同主観性論でそれは役割理論や言語論とからみあって形成されていて、四肢構造論や物象化論というオリジナリティの突き出しになっています。

「そこでは、後に『存在と意味』に結実する問題が鮮明に提示され、またその基盤となる方法論的考察が明快に叙述されているのである。その意味で、廣松渉における『存在と意味』と『世界の共同主観的存在構造』との関係は、デカルトにおける『省察』と『方法序説』との関係になぞらえることができる。『方法序説』がデカルトへの格好の入門書であると同様に、『世界の共同主観的存在構造』もまた読者を廣松哲学の核心へと誘う何よりのプロムナードなのである。」526P

二 時代背景

「廣松渉は当時の学生運動の去就に多大の影響を与え、時代の前髪を掴むかのように大学闘争の渦中に身を挺して関わって行った。」528P

三 同時代の評価

「要するに、「近代か反近代か」、「進歩か反動か」、「実存主義かマルクス主義か」といった単純な二項対立がことごとく意味を失い、左右のイデオロギー的対立の構図が無効化しつつあったのが、この一九六九年なのである。」530P・・・？新左翼運動は左右の対立の図式を鮮明化することであった。

「狭義の哲学の領域に話を限るならば、戦後の哲学図式を支配してきた「実存主義－マルクス主義－分析哲学」という安定したトリアーデが崩れ去り、新たな哲学的パラダイムが求められ始めたのがこの時期である。」530P・・・その後はポスト構造主義と現象学とマルクス派の思想体系として突出していったと押さえられるのだろうけれど、マルクス葬送の流れの中で哲学の逼塞状況は加速し、もはや哲学なき世界の様相を呈しています。

「そうした時代の波頭を過たずに捉え、潜在的な哲学的欲求に明確な「形」を与えたものこそ、廣松の論文『世界の共同主観的存在構造』にほかならなかった。」530-1P・・・当時の新左翼、全共闘運動の理論的なことを考える活動家にとって廣松さんと吉本隆明さんが双璧ででした。ただ、吉本隆明さんはマルクスの唯物史観からはみ出し、意識論を軸に据え、しかも、差別の問題での論攷にはわたしは批判的であったのです。

四 近代認識論の蹉跌

「とりわけ、本巻の前半部分を占める『世界の共同主観的存在構造』は、三〇代後半の著作であることも手伝って、文章も清新な躍動感に溢れており、虚仮威しの文飾も控えられて平明達意の水準を一貫して保っている。「廣松哲学入門」としてまず第一に推挙するゆえんである（もう一冊と言われれば、わたしは躊躇なく『マルクス主義の地平』を挙げたい）。」531P・・・入門書としては難しすぎるので、わたしは当初としては『唯物史観の原像』を挙げ、その後の廣松さん自身に入門書として書かれた『新哲学入門』『哲学入門一步前—モノからコトへ』を挙げる事が出来ます。

「実際、『世界の共同主観的存在構造』の中には「物的世界像から事的世界観へ」という原

題をもつ論文が収録されているにも拘わらず、そこでは「事的世界観」に関する積極的な言挙げはなされていない。著者の努力は一にかかって「認識論の新生」、すなわち「主観—客観」図式に代わる新たな認識図式の提出に捧げられているのである。そのための強力な武器として持ち出されるのが「共同主観性」、「四肢的構造連関」、「物象化」といった廣松独自の概念装置にほかならない。本書においては、それらを駆使して明示的に<語られる>認識論的概念構成の作業を通じて、「関係の第一次性」を基盤とする存在論的主張、即ち「事的世界観」が暗示的に<示される>仕組みとなっている。その意味で、これらの概念装置は老朽化した建築物を取り壊し、廣松哲学の奥の院とも言うべき「事的世界観」へと至る通路を切り開く先鋒隊として、不可欠の方法論的役割を担っているのである。」533P・・・わたしはこの書と『事的世界観への前哨』はセット的にとらえていて、パラダイム転換論を『前哨』の方で展開しているので、ここでは展開していないと押さえています。

「それでは、近代認識論根本前提である「主観—客観」図式の内実とはいかなるものであるのか。廣松はそれを簡潔に(1)主観の「各私性」、(2)認識の「三項性」、(3)与件の「内在性」として特徴づけている。すなわち、近代哲学の文脈においては、認識主観はあくまでも「同型的」な各自の個人的意識として理解されており、また対象認識は「意識作用—意識内容—客体自体」といういわゆる三項図式に即して捉えられ、そこから主観に直接的に現前する与件は客体そのものではなく意識に内在する内容、つまり表象や観念だと考えられてきた。こうした諸前提が「外界存在」や「他我認識」といった近代哲学に特有のアポリアを生み出し、さらには認識の客観的妥当性（意識内容と客体自体との対応）の基礎づけを原理上不可能にすることによって、認識論を一種の袋小路に追い詰めてきたのである。これが廣松の言う哲学の「閉塞情況」にほかならない。」533P

「しかし、廣松の目には、認識の問題を言語の平面に射影して「解明と消去」を図る分析哲学者の手続きは、認識の問題を言語の平面に射影して「解明と消去」を図る分析哲学者の手続きは、単にアポリアを迂回しつつ回避するにすぎない姑息な（ママ）弥縫策と映ったに違いない。（「言語論的転回」と題するアンソロジーを編集し、後に『哲学と自然の鏡』[一九七九]において「近代認識論の終焉を宣告したりチャード・ローティの問題提起に、廣松の論文が十年先立っていたことは記憶に留められておいてよい）。それに対して廣松は、新カント派から受け継いだ近代認識論の道具立てに依拠しながらも、マルクス主義の問題意識を媒介にしつつそれを換骨奪胎することによって、それらのアポリアを内面から正面突破しようと企てる。その第一歩となるのが「共同主観性」の提議による主観の「各私性」の排却である。」534P

五 「共同主観性」の存立構造

「「共同主観性」という言葉は、一般にフッサール現象学に由来するものと考えられており、現象学者の間ではむしろ「間主観性」あるいは「相互主観性」といった訳語が定着している。確かに、廣松自身が「共同主観性（Intersubjektivität=間主観性=共同主観性）」（本巻二八頁）という表記を採用していることから見ても、現象学からの示唆は否定し難い。しかし、フッサールの「間主観性」が他我問題のアポリアを克服するための概念装置であり、最終的には複数の超越論的自我の相互交通から成る「モナド共同体」として規定し直されたのに対し、廣松の場合には「各私的」モナドの自体的存立を認める余地はまったくない。

それどころか、超越論的主観性をモノドとして表象すること自体が、廣松にとっては主観や意識のまぎれもない「実体化」であり、「物象化的錯認」にほかならないのである。」
534P・・・この訳語の違いを押さえることが「廣松共同主観性論」で重要となります。廣松自身の違いの表記をどこかで探さなくてはならないのですが、ここでモノドという概念で野家さんが展開しているように、「間」なり「相互」ということは対面する他我との関係ということであり、「我々としての我」という意味では「共同」こそが「廣松共同主観性論」の核心となります。

「廣松哲学の中で、共同主観性は「記述概念」であると同時に「方法概念」でもあるという二重性をもっている。それはまず、「人びとの思考方式や知覚の仕方そのものが社会的に共同主観化されているという実状」（本巻二六頁）を示すという意味で、現実の事態を描写する記述概念である。この面において、当の概念を用いていないにせよ、マルクス・エンゲルスの著作は先駆的な位置を要求しうるし、文化人類学や精神医学の知見もまた共同主観性の解明に寄与することができる。記述概念としての共同主観性は、廣松哲学の中では後に「表情論」（本著作集第四巻）としてより具体的な展開を見せることになる。」 535P

「他方で「いわゆる先驗的主観性とは共同主観性である」（本巻二〇四頁）と言われるように、それは事実の成立条件を解明するという先驗的（超越論的）機能も担っている。その意味で、共同主観性は旧来の認識図式を転倒し更新するための方法概念なのである。廣松の共同主観性は、記述概念の次元ではマルクス主義を先蹤と仰ぎ、この方法概念という次元では現象学の間主観性と共通の志向を分かち持つと言ってよい。」 535P

「しかし、フッサール自身の「間主観性」は、その超越論的問題設定に制約されることによって、余りにも方法概念の側面に偏しすぎていたと言わねばならない。廣松哲学の独自性は、記述概念としての共同主観性を隣接諸科学の成果を十分に踏まえながら練り上げつつ、それを認識論上の方法概念として厳密に鍛え直していくという複眼的性格をもつところにこそ存するのである。」 536P

「また、共同主観性は「実体概念」ではなく、なによりも「機能（函数）概念」であることが強調されねばならない。」 536P

「あるいはメルロ＝ポンティのように、身体レベルにおける能知と所知の反転を論拠にするにしても、能知と所知のあり方が相互排他的であると考える限り、「主観－客観」図式の大枠を超えることができない（この点が廣松のメルロ＝ポンティ批判の眼目となっている）。それに対して、廣松認識論においては超越論的主観性が<即ち>共同主観性なのであり、そこに「各私性」が入り込む余地はない。」 536-7P

六 「四肢的構造連関」と三項図式

「旧来の認識図式を破砕するために、主観の「各私性」に対置されたのが「共同主観性」であったとすれば対象認識の「三項性」に対置されるのが「四肢構造連関」による認識過程の解明である。」 537P

「とりあえず「意識作用－意識内容－意識主体」という認識論的先入見を括弧に入れてフェノメナルな世界の中に身を置くならば、われわれに現れてくるのは色、形、音、匂い、等々といった感性的所与の集合体ではなく、厚みと奥行きをもった有体的な事物であり、しかもそれは常に「鉛筆として」、「書物として」といった意味を帯びた形象として具体的

に意識される。」 537P

「付け加えておけば、この「項」に対する「函数的連関態」の存在論的優先性は、後に「関係の一次性」として「事的世界観」の基礎をなすのである。」 539P

「近代哲学が自明の枠組みとして依拠してきた「主観－客観」関係は、廣松認識論の構図の中では、認識の成立条件を解明すべき超越論的説明項ではなく、それ自身が解明を必要とする被説明項にほかならないのである。」 539-40P

七 言語論の射程

これは、この巻全体の解説で、他の論文への解説も含んでいるのですが、ここでは『世界の共同主観的存在構造』に絞ってメモを残します。

「要するに、言語活動そのものが四肢的構造連関をなしているのはもとより、四肢的構造連関の存立は、歴史的社会的協働としての言語活動によってその基底が支えられているのである。そのことは認識主体の「同型化」や「共同主観化」が原基的には「意味」の共有化にほかならず、本質的に言語的交通に負うものであることから明らかであろう。」

541P・・・言語的活動以前に言語をも形成する役割理論のことが抜け落ちています。そのことは野家さんが表情論に触れているところからもリンクしていくことです。「〇〇的動物」（「社会的動物」「道具を使う動物」etc）ということでの言及で、「言葉を話す動物」という規定を廣松さんがせず、むしろ「役割」という概念に留意していたということが、確か役割理論の言及の中でされていたはずですが、余談になりますが、わたしは過去に「共同主観的動物」という突き出しを思いついたことがあります。ただ、これはすぐに、いわゆる「自閉症」のひとたちのことがすぐに思い浮かび、「言葉を話す動物」とともに、その差別性に気付いたのでした。廣松さん自身はほとんど差別の問題を主体的に取り上げていないのですが、認識の原基的存在で障害問題を対象化していたところで、「共同主観的動物」や「言語的動物」という規定には至らなかったのではないかという憶測のようなことを考えていました。

「言語論は廣松認識論のみならず廣松哲学そのものにとって、考察を先導する一種の「パラダイム」の役割をはたしていると言うことができる。「発想の源泉」と呼んだゆえんである。」 541P

「また「哲学の仕事と言語学的分析に局限しかねまじき『言語分析学派』が、近年では英米から浸潤して、独仏の哲学界にも瀰漫しつつある」（本巻三三六頁）と嘆ずる廣松自身ならば、自分は言語論を第一の哲学の座に据えたことは一度もない、と反論されることであろう。確かに、その後の廣松は共同主観性を「表情論」など発生論的考察から基礎づける考察に着手しており、一概に言語的交通の優先性を彼の所論に帰すことはできない。しかし、「前期廣松哲学」の最良の成果を収録した本巻に関する限り、言語的考察が一本の赤い糸ように全体の論述を貫いていることは誰の目にも明らかにあるに違いない。」 542P・・・確かに言えなくもないのでしょうか、二つ前の引用とリンクして分析哲学から影響を受けた野家さんの「言語論」への過大評価とも言いえることがあるのでは？

「最後にもう一度繰り返しておけば、廣松哲学の核心は、何よりも「近代哲学」の拠って立つ基盤をトータルに乗り越える認識論的視座を提示し、それを通じて時代の転換に先駆ける「事的世界観」を確立することのうちに存する。」 542P

「**解題**」は廣松理論の文献的整理に力を発揮していて、岩波文庫版廣松渉編輯『ドイツ・イデオロギー』の補訳者にもなっている小林昌人さんがこの著作集を通して担当しています。廣松渉研究に貴重な資料を提供し続けているひとです。

「月報1」

・「廣松渉と西田幾太郎」 小林敏明

『著作集』解説へのコメントで廣松さんが関わった学者の話をしましたが、このひとは廣松さんから指導を受けたひとで、かつ否定的批判に踏み入ったひとです。廣松さんの「事」概念をそれ自体が物象化にとらわれているとして「ことなり」という概念を突き出したのです。ただ、廣松さん自身が四肢構造論で、それも物象化にとらわれざるをえないとされているように、「ことなり」を突き出してもそれ自体が物象化批判の対象から抜け出せません。無限遡及に陥ります。で、何が問題になるのかというと、廣松さんの学的な論考はマルクス派としての運動的などころでの革命としてのパラダイム転換にあることを小林さんには運動志向がないところで、押さえられなかったのではないのでしょうか？

このことはこの月報の文においても、西田と廣松の比較というところでの、その共通性に留目しつつ、決定的な違いということを押さえられていないのではないかという思いにつながっていました。

そのことは「**ホストモダン**」が、その流れに対するある種のシニシズムであるとするなら、「近代の超克」はペシミスティックな時代認識に基づいた一種の懐古的ユートピズムである。だがわれわれの状況は多分そのどちらにも存在していない。時代はもはや西田も廣松をも置いてきぼりにしようとしている。」3P という文の中に端的に現れています。これはそもそも廣松さんが革命としてのパラダイム転換として「事」概念を突き出していること、「近代の超克」も廣松さんはパラダイム転換という観点からとらえ返していることを押さええていないようにしか思えないのです。マルクスの思想は、サルトルやデリダが「資本主義社会では乗り越え不可能な思想」としたように、そのマルクスの思想を深化させようとした廣松の思想も生き続けざるをえないと思っています。わたしがこうやって大風呂敷的に廣松ノートを書こうとしていることもその一端なのです。

・「廣松哲学を英語で語らせる」 M・サントン

廣松哲学が欧米で注目されることが少ないのは、言語の壁にあると言われていています。中国語への翻訳はある程度進んでいるようです。サントンさんは『世界の共同主観的存在構造』を英訳しようとしているようです。いろいろな廣松用語の試訳を出して見せています。最後に「このように言葉をつきつめて使う目的は我々に世界を違った観点より見させ行動させることなのであるから、廣松哲学の英訳に成功したとしたら、哲学は以前とは違ったアクセントで話し始めることになるかもしれない。」と文を結んでいます。

・「**活動家** 廣松渉」 富岡倍雄

「廣松渉は、かくて当時の駒場ではアジテーターとしてオルガナイザーとして画期的な役割をはたしたのだが、・・・・・・・・」というところでこの筆者は、人間味あふれる活動家廣松を書いてくれています。結局、自分の役目はマルクス理論の深化にあるとしてアカデミ

ックな世界に身を投じたということを当人も筆者も書いているのですが、「マルクス研究においてかれなりの結論に到達した廣松はかれ本来の目的たる大衆的マルクス主義運動の実践的活動に復帰したのである。とはいえ、廣松渉は活動家としては不器用であり、いうなれば多分に「下手の横好き」的であった。しかしその「横好き」にひたすら専念する廣松こそが、駒場以来わたしの知っている愛すべき廣松渉なのである。」8Pと文を結んでいます。この文がどこまでの的を射ているか分からないのですが、廣松さんの同時代を生きたひとの思いが綴られています。

講談社（講談社学術文庫）版

（文庫版）「序文」

次号以降

「解説」熊野純彦

次号以降

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 126 号」アップ(22/12/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページ不備・校正があり、かなり大幅な更新をしました。今号の最後に掲載している、「Ⅲ.「会」の当面の研究・執筆課題 (2022.5 全面改定)」を新たに書いています。ホームページ校正したところは、ホームページを見てください。訂正箇所はしばらく赤字にしています。
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

（編集後記）

- ◆今回は、直前まで一回お休みしようかと迷っていたのですが、読書メモの変則的掲載で、どうにか発刊にこぎつけました。
- ◆巻頭言を、「何故、「廣松ノート」を取ろう、書こうとしているのか？」にして、読書メモにその著の『世界の共同主観的存在構造』をとりあげたので、今号は「廣松渉特集」になっています。
- ◆読書メモの『世界の共同主観的存在構造』は、何回かに分けて掲載することになります。変則的な掲載なので、後で大幅な編集と校正を入れ直します。
- ◆「アベ政治を許さない」とまとまっていた立憲リベラルが保守回帰に陥っています。原発の新規建設や、「敵基地攻撃能力」ということを「反撃能力」と言葉を変えてごまかし、

まさにアベ政治が築いた「戦争のできる国作り」に野党がのみこまれそうな様相になっています。資本主義は腐敗臭を漂わせています。いまこそ、社会変革運動のこれまでの総括の中から、社会を変えていく運動を定立させていく必要性が問われています。

◆さて、備忘録的に書いておくのですが、廣松さんの著作に『弁証法の論理』があります。「マルクス・レーニン主義者」が弁証法の法則的とらえ方をしているのに対し（その責任の一端はエンゲルスのマルクス解説としての図式化があるのですが）、対話的深化としての弁証法を対置させています。わたしはそこから、今回、「原則主義と現実主義の弁証法」とか、「反暴力主義と非暴力主義の弁証法」なることを考えて出しています。読者の皆さんの批判・対話の中で、具体的中身を深化させていきたいと願っています。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返ししながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>